

二教授を送る

鈴木規夫

(愛知大学国際コミュニケーション学会々長)

2014年3月31日を以て愛知大学国際コミュニケーション学部を定年退職されるのに伴い、愛知大学国際コミュニケーション学会正会員である新津嗣郎教授、ジョン・ブランデル教授のお二方が本学会を退会されることとなりました。二教授の長年にわたる本学会へのご貢献に感謝致します。

新津教授はふるさとの信州と豊橋のご自宅とを行き交いながら、またブランデル教授は英国へご帰国されて、これから悠々自適の生活に入られるとのこと誠に喜ばしく存じます。

お二方それぞれのご履歴とご業績については、本誌に詳細に記されておりますので、そちらに譲ります。ここでは私の存じ上げておりますお二方の二、三のことがらを添えて言祝ぎたく存じます。

まず、ドイツ文学をご専門とされる新津教授の人となりは、「もろもろの事物のうえに張られた、成長する輪の中で私は自分の生を生きている。おそらく私は最後の輪を完成はすまい。だが、私はそれを試みたいと思っている。」(「時祷集」)というリルケの詩のもつ意味に繋がっていくのかもしれない。

新津教授はリルケに最も親しんでらっしゃるのだといえましょうけれど、「詩は感情ではない、経験だ」(「マルテの手記」)というリルケをめぐる、私も親しんでいる井筒俊彦というイスラーム学の泰斗は、その『意識と本質』の中で概略次のようなことを記しております。

……イスラーム思想には、「マーヒーヤ」と「フウィーヤ」という二つの本質をとらえる概念があるけれども、リルケのような実存的体験を重視する詩人はフウィーヤ、つまり「個体的リアリティー」に強い関心を示す。経験の一回性は重要な意味作用をもち、しかもそこで感受した形象を詩人自身の内面世界に引き込んでいくのであろう。そのものの純粹な形象を、日常言語より一段高次の詩的言語にそのまま現存させようとするのだ。換言すれば、フウィーヤからマーヒーヤへの過程が創作行為であって逆は真ではなく、リルケにとって

マーヒーヤを通してものを見ることは、ものの本源的個性性を最大公約数的平均価値のなかに解消してしまうことであるのだが、問題は言語的意味分節において、つまりリルケが詩的言語で表現するとき起こる困難さである。リルケは、フウィーヤ（個体的リアリティー）は表層意識には自己を開示しないことを知っていた。ノーラに送った手紙で、リルケは、内部の深層次元においてもは始めてものとしてその本来的リアリティーを開示すると述べているが、これは、事物の真の内的リアリティーが、すべてを言語意味的に普遍化する表層意識の対象にはなりえないということと、表層意識と異なる意識の次元の存在があるということとを伝えているのである。その深層領域にあるフウィーヤ（個別的リアリティー）を言語化する、つまり「フウィーヤを非分節的に分節し出さなければならぬ」のであり、「表層言語を内的に変質させるによってしか解消されない」であろうし、「異様な実存的緊張に充ちた詩的言語、一種の高次言語が誕生する」ことになる……。

おそらく新津教授ご自身の探求の糸もそのような本質をめぐる直観に向けられていたのではないかと推察致しますが、そうした事物の本質を直観的に認識する感性は、本間元学長の「大切な学生からの学費をギャンブルに使ってはいけない」という遺訓を破って起こった巨額の資金運用問題とその対処方法の大学執行部の隠蔽的体質の物語る、愛知大学の現状のはなはだ美しくはないあれこれについてもよく貫徹直視され、私たちへの啓蒙にご尽力されてきたこともまた事実であります。

さらに、新津教授の研究室の書架の片隅には、リルケのあいだに、私もファンの一人である諸星大二郎の作品も数点配架されていて、その『暗黒神話』などへの読み込みも誠に興味引かれるのでありました。

ジョン・ブランデル教授が国際コミュニケーション学部設立に伴って愛知大学へ着任されたという意味では私も「同期生」ということになるのですが、ブランデル教授は言語コミュニケーション学科の学生や同僚と時間を過ごされることが多かったので、私の属する比較文化学科の教員諸氏とはあまりお話しする機会をえず、学部同僚という印象はお持ちではなかったかもしれません。

しかし、豊橋へいらしてから日本語ばかりでなく中国語にも関心をもたれて熱心に学ばれていた姿は、学生にとってもよい鑑となったにちがいないことは、少し離れたところにいたわれわれにもとてもよく実感されたのでした。外国語を学ぶ者がしばしば聞く、多くの言語の修得者はそれだけ多くの人生を生きることになるという教えを実践され、遠い東の日本の地でも国を超えた豊かな人生を重ねられたのではないかと羨ましく存じます。

甘味好きの私は、豊橋にある「マッターホーン」というケーキ屋さんで時折ブランデル教授をお見かけしたのですが、その近所にある甘味処「岡女堂菓子司舗」の餡蜜をぜひ味わって頂きたいと思いながら実現できずにいたことが悔やまれてなりません。

ブランデル教授に関して悔やまれてならないことがもう一つあります。

ブランデル教授は特任教授ということで着任されていたのですが、その講義負担ばかりでなく学生対応や事実上の学部・研究科業務への関与の実態は専任教員に匹敵する、というよりむしろそれ以上のものであったと考えられます。その実態を存じ上げていたので、私が教職員組合委員長をしておりました折に、ブランデル教授の専任教員としてのステイタスへの変更とそれにとまなう給与などの諸条件の変更について、当時の学部執行部や大学執行部と交渉したことがありました。結局実現かなわず、とても無力感に苛まれた記憶が蘇ります。ファカルティが一致して調整協力すればできないことではなかったはずなのですが、この件解決を得ぬままブランデル教授ご退職となってしまったことは今以て心残りでなりません。

さて、私も二教授と同年同日を以て本学会会長職から4年ぶりに解放され、しばらく一切の雑務から離れさせて頂いて、研究と教育に専念することができるようになります（そう期待していますけれど）、二教授の真面目に研究を積み上げられてこられた後背に深く学びながら、数えられるほどに短くなってしまった自らの退職の時期にも〈自己への配慮〉を及ぼしつつ、“... , *il faut tenter de vivre.*”とヴァレリーを想起するような次第です。